

鹿児島の動物36

ニホンウナギ

ウナギの蒲焼^{かばや}きは、日本の食文化にとって欠かせないものでしょう。「土用の丑の日」には、全国でウナギを賞味する習慣が定着しています。この、蒲焼に用いられるウナギの標準和名はニホンウナギといいます。学名は *Anguilla japonica* で、種小名の *japonica* は日本を意味します。日本の各地で養殖が行われていますが、実は鹿児島県は日本一の養殖生産量を誇っており、特に大隅半島がその中心となっています。



ニホンウナギ（撮影：米沢俊彦氏）

ところで、ウナギ類の繁殖については、長く謎に包まれてきました。古代ギリシャの哲学者アリストテレスは、ウナギは海底の泥から生まれると考えていたほどです。最近の研究で、ニホンウナギの産卵場は太平洋のマリアナ諸島北西海域であることが分かりました。ふ化した仔魚は、透明でヤナギの葉に似た薄い体形の、レプトセファルス幼生になります。この頃は海中を漂う有機物の固まりであるマリンスノーを食べているらしいのですが、詳細はまだよく分かっていません。幼生は海中を浮遊しながら北赤道海流や黒潮で運ばれて日本の沿岸に接近し、成魚と同じ細長い体形をした半透明のシラスウナギに変態します。

河川をさかのぼってからは淡水中で生活すると考え



全長約16mmのレプトセファルス

動物担当 池 俊人
られてきましたが、最近の研究で興味深いことが分かってきました。実は、ニホンウナギは河川生活をする個体の他に、河口や海で生活する個体も多いということです。淡水と海水のどちらでも生きられる、高い適応力をもっているのです。

このニホンウナギの養殖をするためには、まず種苗となるシラスウナギを採捕しなくてはなりません。冬季の河口近くの海岸では、夜間に発電機で照明を灯して網ですくい捕るシラスウナギ漁を行う様子が見られます。

ところが、近年採捕されるシラスウナギの量が激減しており、養殖に必要な量を十分に確保できないという問題が生じています。河川環境の悪化や乱獲などが原因だと考えられ、環境省レッドリストでも絶滅危惧IB類に指定されることになりました。

天然資源に頼らないニホンウナギの養殖をするためには、種苗生産を人工的に行う必要があります。水産総合研究センターでは、2002年に世界で初めてシラスウナギの人工生産に成功し、2010年に完全養殖を達成しました。レプトセファルス幼生はサメの卵を用いた飼料を摂食して、少数ではあるもののシラスウナギまで育てることが可能になったのです。しかし、大量生産はまだまだ困難で、水産総合研究センター志布志庁舎をはじめとする多くの研究機関では、種苗の大量生産のための技術開発に取り組んでいます。



志布志庁舎の小型飼育装置

さて、毎年ニホンウナギが鹿児島にやって来るのは、「黒潮」のおかげです。ウナギの他にも、鹿児島には「黒」にまつわる畜産物や特産品が数多くあります。これらを展示・紹介する企画展「かごしまの黒にせまる」が、2014年12月20日から平成27年3月1日まで、鹿児島県立博物館にて開催されますので、多くの方に来館してご覧いただきたいと思います。